

『かげろふ日記』「さいはひある人のためには」の解釈

―運不運をめぐる道綱母の嘆き―

工藤重矩

(平成十年八月二十七日受理)

一 はじめに

道綱母を嫉妬に苦しめた、町の小路の女と兼家との関係は、町の小路の女が見捨てられるというかたちで終り、道綱母は晴々と女の惨めさを日記に記している。だが、だからといって道綱母の立場が時姫を逆転できたわけでもなかったし、兼家が以前よりも頻繁に訪れてくることもなかった。兼家は時姫のもとに帰ったのであった。道綱母もしだいに自分の立場を客観的に認識せざるをえなくなつてゆく。

町の小路の女の件の行先が見えた天徳二年(九五八)から六年後の康保元年(九六四)夏には次の記事がある。(引用は柿本奨『蜻蛉日記』角川文庫による。ただし漢字平仮名・読点を改めたところがある。)

月夜の頃、よからぬ物語して、あはれなるさまのことども語らひてもありし頃思ひ出でられて、ものしければ、かく言はる。

曇り夜の月とわが身の行末のおぼつかなさはいづれまさされり

返りごと、たはぶれのやうに、

おしはかる月は西へぞ行先は我のみこそ知るべかりければ、頼もしげに見ゆれど、わが家とおぼしき所は異になむあんなれば、いと思はずにのみぞ世はありける。さいはひある人のためには年月見し人も、あまたの子など持たらぬを、かくものはかなくと思ふことのみ繁し。(角川文庫 五三頁)

道綱母は行末の不安を訴え、兼家は返歌に、私に任せておけと頼もしげにこたえてはいるが、兼家が「我が家」と思っているらしい所が道綱母の所でない事は、道綱母にも明白だから、「いと思はずにのみぞ世はありける」と嘆く。ここまではさして問題はない。次の一文「さいはひある人のためには」云々が注釈書によりまぢまぢの状態である。

私自身も納得できる解釈ができないでいたのだが、「さいはひ」という語を検討するなかで一案を得た。そこで、ここにその解釈を提示し、あわせて道綱母の運不運の意識にも言及しようと思う。実は別稿(「源

氏物語の個人・家族・社会―「さいはひ」さいはひ人」をめぐって―
『源氏物語研究集成 源氏物語の思想』所収 風間書房 刊行予定)に
おいて結論の解釈のみは提示したのであるが、論文の趣旨から逸れるの
を避けて、論証過程を十分に書くことができなかった。それゆえ、ここ
にあらためて単独に取りあげる次第である。「さいはひ」「さいはひ人」
についての諸事は右の拙論の参照をお願いしたい。

二 これまでの解釈

解釈の分岐点は、「さいはひある人のためには年月見し人も、あまた
の子など持たらぬを」云々の「さいはひある人」「年月見し人」に誰を
当てるか、である。大きくは「さいはひある人」を女(この中にも、女
を特定しないもの、時姫とするもの、道綱母とするものと別れる)と
する解釈と兼家とする解釈とに分かれ、「年月見し人」も道綱母と兼家
とに分かれる。

【A】

〔A1〕例えば、柿本奨『蜻蛉日記全注釈』(昭和41年初版 引用は57年
版による)は、

しあわせな人になるためには、長年の夫だのに、子どもがたくさん
生まれないのが気になって、

と口語訳し、語注では、

○さいはひある人のためには 幸のある人であるためには。幸の
ある人になるためには。この下に、多くの子を持たねばならないの
に、の意がこめられている。この「人」は一般的にいう。一身が栄
達するだけでなく、家ひろごる、すなわちすぐれた子孫を多く待っ

た人を、幸ある人と、この当時の人は考えていた。子は親によって
地位を得、栄えることもあるが、親はまた子(男子女子とも)の栄達
によって重んぜられ権勢を得る。

○年月見し人 長年わたしを妻とした人。兼家を指す。

と説明している。そして「余説」では「あまたの子など持たらぬを」
と記したとき、作者の脳裏に『子どもあまたありと聞く所』である時姫
のことがこびりついて離れなかったであろう」とも言う。されば、『全
注釈』は、そうと明示していないが、「さいはひある人」は時姫を念頭
においていたと見なしているのであろう。大西善明『蜻蛉日記新注釈』
(昭和46年)は柿本『全注釈』によって『かげろふの日記新釈』(後掲の
A3の項参照)の解釈を改めている。

〔A2〕「さいはひある人」を時姫と明記しているのは、増田繁夫『か
げろふ日記』(創英社新書 昭和53年)である。

最初からの妻の時姫をさす。作者に子が一人しか生まれないため、
時姫の立場が安泰だと考えている。

ただし、後者の「年月見し人」を「何年間もあの人を通ってきた私」と
理解している点が異なっている。この部分の現代語訳は

幸運な人にとっては、何年間もあの人を通してきた私にも、たくさ
んの子供などもないし、こう心細い有様で、物思ひばかり多い。
となっており、時姫を指すとする「幸運な人にとっては」がどこに係っ
てゆくのか、文意がはっきりしない憾みがある。

〔A3〕しかしながら、「さいはひある人」を女性と見なす注釈書の多
くはこれを道綱母のことと解釈している。例えば喜多義勇『蜻蛉日記講
義』(昭和19年)は「世間で自分のことを幸福な人だといつてゐるが、
さういはれる為には」と言う(朝日古典全書『蜻蛉日記』昭和24年版は

これと同じだが、『全講蜻蛉日記』昭和36年は後掲の〔B〕の説によって「幸運に恵まれている人に対しては。この『人』を兼家とする説に従う」と改め、朝日古典全書『新訂』版も「幸運な兼家にとつては、かうして長年関係を続けても」と改めている。

川口久雄『岩波古典大系』（昭和32年）は「作者の幸薄きを逆説的にいう」と説明して、

全く幸福な運命の人というものは、もう十年の関係になるに拘らず多くの子供にも恵まれません。

と口語訳し、次田潤・大西善明『かげろふの日記新釈』（昭和35年7月）も同様に「作者自身の身の上を皮肉に言ったのである」と解している。

この「逆説的『皮肉』とする解釈、早くは池田亀鑑『物語日本文学第八巻 蜻蛉日記上』（昭和19年）が「幸福な人のためには」と訳し、「自らを嘲笑的にいつた語」と言い、さらに早くには上村悦子『解釈大成』に引用される小中村清矩の説に「幸アル人トハ吾身ノ薄命ナルヲワザトカク云ニヤ。年久シク兼家通ヒ玉ヘド唯道綱一人ヲ生テ子ノナキコトヲ云ル歟」ともあるごとく、かつては有力な解釈であった。

〔A4〕川瀬一馬『蜻蛉日記』（講談社文庫 昭和55年）は

幸運ある人になるためには、長年夫婦で暮らした私も、大勢の子宝に恵まれていないので、

と口語訳し、「年月見し人」に「作者自身をさす」と注している。「さいはひある人」を一般論と見る点では〔A1〕と同じだが、「年月見し人」を作者と見る点は〔A2〕〔A3〕と同じである。

ところが、〔A〕が「さいはひある人」を女に関わることだと解釈するのに対し、例えば木村正中・伊牟田経久『小学館新編古典全集』（平

成7年）は、

幸運に恵まれたあの人のために、長い年月連れ添ってきたわたしなのに、大勢の子供に恵まれているわけではないので、このように頼りないありさまでは、思い悩むことばかりあれこれ多い。

と現代語訳して、頭注には

（さいはひある人）幸運に恵まれて社会的にめざましく躍進していく人、すなわち兼家。

（年月見し人）長い年月夫婦として暮らしてきた人、すなわち作者。と説明している（旧版も同じ）。

この解釈は、木村正中「『さいはひある人のためには』について」蜻蛉日記の新しい解釈のために―（『解釈と鑑賞 昭和35年2月号』）によって唱えられ、秋山虔・上村悦子・木村正中の『解釈と鑑賞』連載の「蜻蛉日記注解（昭和38年10月号）」に採用されている。やや長くなるが、木村論文を引用する。「さいはひある人」を女とする解釈を検討批判したうえで、「さいはひ」の語の社会的現象的要素を重んじて、

当面の「さいはひある人のためには」を、前述した二説のごとく、作者の理想的状态、あるいは時姫を主体とした兼家の妻妾と解することを別に妨げるわけではない。しかしながら道綱の将来を「おぼえぬさいはひもや」といって、伊尹を「さいはひある人」と見ているらしい前述の例と同様の言語心理を、こゝにも当嵌めるとするならば、従来の二説とは異なった今一つの別解が可能になってくるであろう。それは「さいはひある人」を兼家を指すと見る解釈である。

彼は応和二年従四位下、東宮昇殿、さらに不本意な兵部大輔の官職に遷されたが、翌三年還昇、四年すなわち康保元年右京大夫となり、同四年蔵人頭に就任、「蔵人の頭などいひての、しれば」と本日記

に記されているごとく、これから彼の躍進的な社会的政治的な活動が始まる。殊にこの部分が後年の記述であるということを考えれば「さいはひある人」を兼家と見ることに何ら支障はないはずである。

以上のごとく「さいはひある人」を兼家と想定するならば、その内容に曖昧なところを残したり、無理を推したりすることなく、極めてスムーズな解釈がなされ得るであろう。「あまたの子などもたらぬ」事実を、彼女の悲しむべき不幸な現状の率直な実感としてのみ受取ればよいのであり、また作者の感情としては余りにも一方的過ぎる時姫への対立意識を、こゝで問題にする必要がなくなる。

以後この解釈が主流となってゆく。犬養廉『新潮社古典集成』（昭和57年）の頭注も「さいはひある人」に「幸運に恵まれ順調に栄進を重ねる兼家と見る」と注し、「あの人のために〔苦勞して〕長年連れ添ってきた私なのに 大勢の子供に恵まれたわけでもなく」と口語訳を付している。上村悦子『解釈大成 第2巻』（昭和61年）も「幸運に恵まれたあの方のために、長い年月連れ添って来たわたし自身も大せいの子どもに恵まれていないので」と訳している。「B」の場合は、おのずから「年月見し人」は道綱母と考えられているようである。

【C】

これらともやや異なる解釈に、今西祐一郎『岩波新古典大系』（平成元年）がある。その脚注の口語訳は、

幸運に恵まれている人ならば、子供が多勢いなくても長年妻として夫に連れ添うといった場合もあるのに。

とある。これは「ためには」を「…ならば」の意に取り、「も」を仮定の用法とみなして、「たとえ年月見し人でもあまたの子供を持っていないこともあるのに」と考えて、上記のように意識したものであろうか。

「人」の当て方は、どちらかと言えば、「A4」に近い。

右のごとく、この部分の解釈は大きな揺れを示している。このところの文章自体が滑らかでなく、省略あるいは屈折があるらしく感じられ、いずれの注釈書も論理の通った訳を施すのに苦勞しているさまが、その口語訳や語注にうかがわれる。現在もっとも広く採用されている木村正中の解釈にしても、「さいはひある人」を兼家とするところに不安が感じられ、全面的な賛同を得られていない。そこで、「さいはひある人」
「ためには」の用法を中心に、解釈の再検討を試みようと思う。

三 さいはひある人のためには

1 「さいはひある人」とはいかなる人か

「さいはひある人」とは、いくつかの注釈書がそう説明しているように、幸運にめぐまれた人の意で、幸福な人の意ではない。木村論文もそのことを指摘しているが、「さいはひ」の用例、かげろふ日記には他に三例ある。それを初めに見ておこう。

①天禄二年四月（角川文庫一三八頁）

長き精進をなむ始むる……とて、始めつ。我はた初めよりもことごとしうはあらず、ただかはらけに香うち盛りて、脇息の上に置きて、やがて押しかりて仏を念じ奉る。その心ばへ、ただ、極めて幸ひなかりける身なり、年頃をだに心に心ゆるびなく憂しと思ひつるを、ましてかくあさましくなりぬ、とくしなさせ給ひて、菩提かなへ給へ、とぞ行ふままに、涙ぞほろほるとこぼるる。

②天禄三年二月（角川文庫一八九頁）

（右の足の裏に「おとゞかど」といふ文字を書き付ける夢を見て、大臣の家との夢解きを得て）これもをこなるべきことなれば、ものぐるほしと思へど、さらぬ御族にはあらねば、わが一人持たる人、もしおぼえぬ幸ひもや、とぞ心のうちに思ふ。

③天禄三年八月（角川文庫二一六頁）

今や今日やと待たるゝ命、やうやう月たちて日もゆけば、さればよ、よも死なじものを、幸ひある人こそ命はつゞむれ、と思ふに、うべもなく九月も立ちぬ。

①では、自分が極めて運に恵まれていない身の上だったのだと強く確認している。③は病を持ち直した後の感慨。運に恵まれた人こそかえって命を縮めるものだが、と言うのは、自分は運に恵まれていないという意味の裏返しである。このような意識は兼家との仲が不調和になつてからのものと言うべきではあるが、康保元年の「さいはひある人」を、自分の身の上を自嘲的に（逆説的に）述べたのだと言うのは、あまりに屈折した解釈であろう。道綱母が自分のことを「さいはひある人」とは意識していない、すくなくともかげろふ日記の執筆時にはそう思っていないのは明らかなので、「さいはひある人」は兼家を指すという木村論文が現れ、一定の賛同を得たのであろう。

しかしながら、「さいはひ」は「さいはひあり」「さいはひ人」という言葉の用法を他の文献をも含めて通覧すると、兼家を指すというのも疑問である。詳しくは前記別稿に譲るが、これらの語は、「幸運」「幸運に恵まれる」ことを意味する。源氏物語において、明石君、宇治の中君、そして紫上が「さいはひ人」と言われるのは、いわゆる玉の輿に乗った人と

見なされたからである。

大鏡では藤原道長をも「さいはひ人」と呼んでいる。撰関家とはいえ五男に生まれた道長が頂点を極めたのは、その実力に加えて、究極の幸運があったからだが大鏡は言う。すなわち、

かく大臣公卿七八人、二三月のうちにかきはらひ給ふこと、希有なりしわざなり。それもただこの入道殿の御さいはひの上を極め給ふにこそ待るめれ。（道長伝）

という。確かに、この「さいはひ」がなければ、道長といえども頂点に立つのは困難だったであろう。このような人を「さいはひある人」と言うのである。

前引の②で道綱母は、我が子道綱の「おぼえぬさいはひ」を期待しているが、それは順当に昇進しても嫡子（道隆、道兼、道長）のいる中の庶子である道綱には、大臣は「おぼえぬさいはひ」に属する事柄と意識されているのであろう。

木村正中は藤原伊尹薨去に関する日記下巻の記事に関連して、

その年（天禄三年）十一月一日太政大臣藤原伊尹が薨去した。「れいのあないみじなどいひて、ききあへる夜……」とのみ記されているが、これは前の「さいはひある人こそ命はつゞむれ」という言葉に一つの暗示を参照する。つまり作者の胸裏には、伊尹のごときこそ、正に「命をつゞむる」に値する「さいはひある人」であるという觀念が浮かび得るのである。そうは書いていないけれども、私にはこの両記事が全く無縁のものとは考えられないのである。とすれば、太政大臣という社会的地位、氏の長者としての権勢、もし伊尹が「さいはひある人」であるならば、当然こういうものが考慮されなければならない。

と言う。大鏡伊尹伝に「ただ御かたち、身の才、何事もあまり優れさせ給へば、御命のえ調はせ給はざりけるにこそ」ともあり、『小学館新編古典全集』頭注ではこの条が指摘されている。

大鏡伊尹伝の思想は、源氏物語絵合巻に源氏が「院ののたまはせしやう、才学といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、命、幸ひと並びぬるはいと難きものになむ」といい、古事談に古老の伝として、高麗の相人が時平は賢慮が道真は才能が国に過ぎるので長寿は保ち得ないだろうと言ったという類のそれである。

そのような思想はそれとして、木村論文も自ら認めているとおり、道綱母は伊尹を「さいはひある人」と言っていたわけではないし、そもそも道綱母が、右大臣（贈太政大臣）師輔の長男で摂政太政大臣となった伊尹を評して「さいはひある人」と言うとするれば、それは甚だ非礼なことである。何故に非礼であるかといえば、この言い方は、その地位が本人の実力ではなく、幸運によるのだということになるからである。（この機微については別稿を御参照されたい。）大鏡は良房や道長をも「さいはひ人」に数えているが、そう言えるのは道長が「歴史」となって後のこと。生きている間は、道長にたいして、運の良い人だとは、大きな声で言えることではない。陰でささやくことはあるだろうが。

伊尹について言えば、父の師輔は忠平の次男であり、昇進は長男実頼（八歳の年長）の後塵を拝していたが、兄に勝る政治的才能を發揮し、安子の後宮に入れ、安子は後の冷泉・円融天皇を生み、右大臣師輔は兄左大臣を圧倒する勢いを示した。師輔は兄実頼より早く天徳四年（九六〇）五月に薨ずる。師輔の長男伊尹は実頼の長男頼忠とは同年齢であったが、同年八月には参議に昇り（頼忠は三年後の応和三年）、康保四年（九六七）正月には中納言、十二月権大納言（頼忠はなお参議）に、安

和三年（九七〇）正月右大臣、五月には実頼の薨去をうけて摂政となった。頼忠はその時権大納言であった。師輔子孫の繁栄の基は師輔によって据えられた。だから、伊尹たちの栄達は「さいはひ（幸運）」に拠るのではない。源氏物語の夕霧の栄達が幸運によるのではないのと同じである。そのような人々は「さいはひ人」とは呼ばれない。運に恵まれたのではなく、当然の結果だからである。道長のばあいは、上席の大臣公卿が短期間に何人も薨ずるといふ幸運があった。道長にはその幸運をいかに実力があつた。実力だけではどうにもならないところを幸運が助けてくれた。だから道長は「さいはひ人」なのである。

道綱母は我が子道綱の将来を樂觀していない。父兼家が何かにつけて道綱を道隆達（時姫所生の子息）と區別して扱っていると感じている。道綱がもし大臣になれることがあれば、それは「さいはひ」以外ではない。「おぼえぬさいはひもや」という言葉に、道綱母とその子の置かれている立場の辛さがうかがえる。

撰関家の男たちをめぐる「さいはひ」は右のような意識だとすれば、はたして兼家を「さいはひある人」と呼べるだろうか。換言すれば、兼家に世話を受けている道綱母が、その兼家を評して「さいはひある人」と書けるか、ということでもある。

前引の木村論文にも見られるように、兼家は師輔の三男としての官歴は、もとより撰関家以外の者と比較すれば別だが、他の兄弟に比べて格別に優遇されたものでもない。兵部大輔に遷されて腐っていたさまが、かげろふ日記に記されていることは周知のことである。康保元年（九六四）は右京大夫の官にあつた。撰関家の男としてはこれも恵まれた官とはいひ難い。政治の表舞台にでてくるのは、同四年（九六七）六月の蔵人頭以後である。しかし蔵人頭程度では兼家を「さいはひある人」とは

言えない。当然の官歴と**言うべき**だからである。既にこのとき長兄伊尹は権大納言であった。次兄兼通は四年正月に蔵人頭となっていたが、兼家はまもなくこれを逆転し、安和二年(九六九)兼通に先んじて参議となる。ところが、天禄三年(九七二)伊尹が薨ずると、関白の詔は兼通に下され、以後、二人は厳しい対立を続け、貞元二年(九七七)兼通は関白を辞するにさいし、病をおして参内し、実頼の息男である頼忠を次の関白にと奏上したのは、大鏡などで有名な逸話である。翌三年十月(五〇歳)に右大臣、寛和二年(九八六。五八歳)摂政となる。

康保元年はなお右京大夫だから、木村論文はその「さいはひあり」とは言い難い状況を「殊にこの部分が後年の記述であるということを考えれば」ということで切り抜け、『さいはひある人』を兼家と見ることに何ら支障はないはずである」と結論している。『古典全集』は「この段の結びも、主に『蜻蛉日記』執筆時の作者の意識に基づいてはいるのだろうが(『新編』版では「結びの文章は、主に執筆時の意識を投影するが」と言っている。かりに上巻の執筆が天禄二年頃だとすれば、官は参議であり、それならば「さいはひあり」と言うのも可能と考えたのであろう。(ただし、この頭注は「かくものはかなくて思ふことのみしげし」の方を強く意識しているのかもしれない。)

しかし、道綱母は我が子道綱についてさえも、思いがけない「さいはひ」があれば大臣にもなれると期待した。兼家の一族を「さらぬ御族にはあらねば」―すなわち、大臣を出す御一族だから、と認識しているのであるから、兼家について参議になった程度で「さいはひある人」とは言わないであろう。それに何より、原田芳起「文学的発想における『さいはひ』―中古物語文学に関する試論―」(樟蔭国文学15号 昭和52年10月)にも述べられているごとく、「さいはひあり」という言い方は、

本来あるべき以上のすばらしい(本来ならばとうていありえない)状態にある者を評する言葉である。仮に摂政関白になった後であっても、道綱母が兼家に対して使える言葉ではない。むしろその一事によって、かげろふ日記のこの条の「さいはひある人」が兼家を指すことはない、と**言**ってよいほどである。

以上のことから、「さいはひある人」は兼家以外の人と考えねばならない。道綱母自身は「極めてさいはひなかりける身」と意識しているから、おのずから「さいはひある人」は時姫あるいは一般的表現と解さざるを得ない。

2 「ためには」

「ゝのために」は、特別に難しい表現ではなく、喜多義勇『全講蜻蛉日記』などに正しく説明されており、「ゝに」としては「ゝ」に対しては「の意である。木村論文でも「中古語の『ために』の一般的な意義用法は、目的とか身上に関する意を表わすとかするのが普通」と指摘されている。一部の注釈書はこれを「ゝになる為には」「ゝである為には」の意に解しているが、そのような用法はない。辞書にも(辞書がいつも正しいというのではないが)その意味では登載されていない。

「あの人のために長年連れ添ってきた私なのに」のような訳は、例えば『角川古語大辞典』で「①多く人物を表す体言の文節を受けて、その利益になること、その役に立つこと、の意を表す。」と分類するのに当たるであろう。用例には「ひめ君の御ためをおぼせば、おほかたの作法もはじめよなからず、いとものしくもてなさせ給へり(源氏・乙女)などが掲げられている。」「ゝに対しては、ゝにとつては」の意は、

同じく「②多く人物を表す体言の文節を受けて、その利害関係として、それにとつて、という意を表す。」と説明し、用例には「天地は広しいへどあがためは狭くやなりぬる(万葉・八九二)などが掲げられている。「我がためはさるものにて、人の御ためいとほしかるべし」(源氏・常夏)などもこれに当たるのであろう。①も②も基本的には同義であることは言うまでもない。

かげろふ日記にあつても、「いにしへを思へば、我がためにしもあらず、心の本性にやありけむ」(天禄元年。一三〇頁)「行基菩薩は、ゆく末の人のためにこそ、実なる木は植ゑ給ひけれ」(天禄二年。一三五頁)などは①の用法であろう。「山の末と思ふやうなる人のために、遙かにあるに異なるにも」(天禄二年。一五三頁)「大納言などの、よけれど、わがためは、まして所せきにこそあらめ、と思へば」(天禄三年。一八四頁)などは②の用法と見なしてよいであろう。

さて「さいはひある人」のためには年月見し人も」の用法もこの範囲だとすれば、どのような意味になるだろうか。

「ために」の用法からは、「年月見し」の対象が「さいはひある人」だということになる。したがって、逐語訳すれば、「幸運に恵まれた人に対しては長い年月世話した(連れ添った)人も」となる。「さいはひある人」は前述のごとく、兼家ではない、道綱母以外の女である。「年月見し人」はおのずから男だから、兼家である。「さいはひある人」を对象として「年月見し」と言っているから、「さいはひある人」は一般的な漠然とした対象ではなく、具体的な人物を指している。そして兼家が長年世話をした女といえ、まず時姫を想定すべきであろう。

そこで前後の文脈を考え、言葉を補って試訳してみよう。

運に恵まれた人(時姫)に対しては長年世話をした人(兼家)も、(私は時姫と違つて運に恵まれず)たくさんの子など持つていないので、(兼家に見捨てられ)このように頼りない状態で悩むことが多い。

「さいはひある人のためには」と、特に取り立てて言うのは、道綱母に対しては兼家も「年月見る」ことはしてくれない、との含意である。長く連れ添っている時姫には「子どもあまたあり」なので「さいはひある人」だと言う。この言い方は、長年連れ添つて子どもも多く生まれ、兼家から「我が家」と思われている、そういう時姫を幸運に恵まれた人だと、結果からさかのぼつて評している言葉である。それに対して「あまたの子など持たらぬ」私は(さいはひなし―運がない)という理屈である。

道綱母がこのような表現をしているその意識を推察すれば、結婚当初の期待が消え、道綱母には時姫を「さいはひある人」と意識し、自分を「さいはひなかりける身」とする意識が生じていたのであろう。

四 「さいはひある人」と「さいはひなき人」

道綱母自身の「極めてさいはひなかりける身」という意識とその反対概念である「さいはひある人」とはどのように違うものなのか、その対比について見ておこう。

「さいはひある人」は、運に恵まれている人の意であるが、同じ語が落窪物語巻二に見いだされる。もと中納言邸(落窪姫君の父邸)に仕えていた女房である少納言が新しく少将邸に仕えることになり、女君が落

窪の姫君であることを知った後の思い。

君はまづねびまさりて、いとめでたうてゐ給へれば、いみじくさいはひおはしける、とおぼゆ。

(古典大系 一四九頁)

とあり、さらに、少将(中将となつてゐる)と姫君の仲良きを見て、少納言、めでたくきよげにおはしける君かな、いみじく思ひきこえたまへるこそあめれ、さいはひある人はめでたきものなりけり、と思ひぬたりけり。

(古典大系 一五一頁)

と語られる。「めでたく……こそあめれ」までは男君についての感想。「さいはひある人はめでたきものなりけり」の部分は落窪姫君についての感想。「なりけり」は例の気づきの用法である。

この落窪姫君も父邸にいたときには、姫君自身、

心のうちには、とありともかかりとも、よき事はありなむや、女親のおはせぬに、さいはひなき身としりて、いかで死なむと思ふ心深し。

(巻一 四七頁)

と、運のない身のうえと意識していた。

落窪姫君は一人の上の運命の変転であるが、人物間における運の有りの無しの対比が最も鮮明になされているのは、源氏物語玉鬘巻における、右近による紫上と玉鬘との比較の条である。

うちとけ並びおはします御ありさまども、いと見るかひ多かり。女君(紫上)は二十七八にはなりたまひぬらんかし。盛りに清らにねびまさりたまへり。すこし程へて見たてまつるは、またこの程にこそにほひ加はりたまひにけれ、と見えたまふ。かの人(玉鬘)を、いとめでたし、劣らじと見たてまつりしかど、思ひなしにや、なほこよなきに、さいはひの無きと有るとは、隔てあるべきわざかな、と見あはせらる。

(小学館古典全集 (3) 一一三頁)

紫上も玉鬘も、女親に死に別れ父親に見捨てられたことは同じであるが、紫上は光源氏に見いだされて愛され、玉鬘は僻遠の筑紫にさすらい命からがら上洛してきた。「さいはひのある(運がある)人」と「さいはひのなき(運がない)人」とは、当然おおきな隔たりが生じるものなのだ、二人を見ながら右近は考える。

右は物語の中の例であるが、道綱母の意識もこれとそう遠いものではなからう。留意しなければならぬのは、時姫を「さいはひある人」と捉えている点、つまり時姫の今の状態を幸運によるのだと理解していることである。

これは二つの方向から考える必要がある。ひとつは時姫と道綱母との兼家の妻・妾としての立場への、道綱母の認識の問題。またひとつはその事とも関連するが、時姫と道綱母との出自の問題がある。

時姫がもともとの正妻であり、道綱母は妾として結婚したこと(厳密には結婚とは言えないが)は、拙著『平安朝の結婚制度と文学』(風間書房 平成6年)で述べたごとく、疑う余地のない事柄である。にも拘わらず、道綱母は、康保元年時点の差は運の有りの無しによっているのだと思つている。そしてそれは具体的には子どもが多寡として意識されている。従来、子どもが多ければ道綱母も正妻になれたのだ、という理解がなされていた理由は、この道綱母の記述に基づいてもいたのである。しかし、前記拙著に例示したとおり、子どもがいなくてもそれ自体で正妻の座が左右されることはない。

ところが、かげろふ日記の記述には、結婚当初の頃は兼家の愛情は我身におのみ受けられるはずと思つていたふしがある。上巻の兼家にたいする不満反発、中巻冒頭の「三十日三十夜は我がもとに」という戯れの言葉にも、自分の置かれている世間的な立場をはるかに越えた要求を、当

然のこととして要求している趣がある。

たとえ妾の立場ではあっても、兼家の訪れを求めるのは当然の要求ではあるし、歴史上の例としても、正妻死後の藤原長家に愛され男君もあまた生まれて「さいはひ人」と呼ばれた中将の君の例もある（拙稿「源氏物語の個人・家族・社会」参照）。宇津保物語の俊蔭女はいわば妾であるが、正妻女三の宮をはるかに凌いで愛されている（拙著『平安朝の結婚制度と文学』）。かげろふ日記の序にいう「世に多かるふる物語」にはそのような話も多くあったであろう。

だから、道綱母が時姫をこえた愛情を求めるのは、あってはならないことではない。それは妾の立場と矛盾しない。ただし、そのようにすれば、世間の矚目を、特に正妻の不快感を誘発することは、当然予想しなければならぬ。中巻冒頭近く、兼家邸近くに転居の後、時姫方と下衆同士があらそいを起こすのはその一例である。そうなれば、妾の立場にある道綱母が譲らなければならぬのは、当時の世間の常識であるし、道綱母もまた再転居せざるをえなかったのである。

そうして結果的には、愛情においても時姫を越えることができたとは言いがたい。兼家も正妻の時姫と他の女性たちとは嫡庶の区別をして扱ったのだと思われる。上巻執筆時には道綱母も、寵愛の衰えたみずからの立場が「ものほかなき」「あるかなきかの心地するかげろふ」のようなものだと思われていた。

そうだったのは「極めてさいはひなき身（まったく運に恵まれていない身のうえ）」だから、というのが道綱母の意識である。―すこしでも運に恵まれていれば、たとえ妾としての結婚であっても、もっと幸福になれただろうに。もしかして時姫が死ぬことが有ったかもしれないし、あるいはもっと子どもが多く生まれて兼家が自分を大切にしてくれただか

もしれない。そうならなかったのは、自分にはまったく運がなかったのだ。―そのような無念さがあるのである。

時姫は公卿補任・尊卑分脈・大鏡によれば摂津守藤原中正の娘（尊卑分脈では中正の男参議安親の娘とする伝もある。ただし安親は兼家より七歳みの年長だから、中正娘がよいであろう）である。藤原中正は諸氏の論じているとおり、いわゆる受領層の者であり、作者の父藤原倫寧とはほぼ同じ階層である。

この事を以て、時姫は妻として道綱母に優越していたわけではないとする考えもある。しかしながら、この考えは誤りである。正妻として結婚した者が正妻なのであって、家の階層の優劣によるのではない。もとより当時にあっては、政治的に有利な結婚は好ましいから、そのような選択をすることは多いが、内親王であっても正妻の離婚なしに妻の座を得ることできないのは、藤原頼通の妻隆姫の例で明らかである。実家が同程度だからといって、男の愛情如何で妻の座が左右されるものではない。そのように考えるのは、複数の妻に優劣がなく、事後的にしたいに正妻の座が決まるのだという、高群逸枝の誤った婚姻制度説の受容による誤解である。離婚しないかぎり正妻が入れ替わることはない。

時姫を「さいはひある人」という道綱母の意識は、しかし、家柄が同程度ということと無関係ではあるまい。際立った家でもない受領の娘である時姫が、三男とはいえ撰閥家の兼家と正式の結婚をし、順調に多くの男女が生まれた。兼家は幾人もの女と関係を結ぶが、結局はいつも時姫のもとに戻ってゆき、そして時姫には子女が長期間継続的に（九五三年道隆、某年超子、九六一年通兼、某年詮子、九六六年道長）生まれていく。時姫の妻の座が揺らぐことはない。

一方の道綱母は同じく受領の娘として生まれ、美貌と才知の評判を得

て、兼家の求婚そして結婚（天曆八年、九五四年）に至った。兼家の態度からは愛情の独占の期待もあったかもしれない。しかし、道綱の誕生（九五五年）の翌年には兼家が町の小路の女に通っていることを知り、ますます訪れなき嘆きを重ねることとなった。

時姫が撰閑家の兼家と正式の結婚ができたことがすでに幸運（さいはひ）であり、子どもが多く生まれたのも幸運のもたらすところである。自分が妾としてしか結婚できなかったのも、子どもが道綱のみであるのも運の拙い我身ゆえである。運の有無が二人の人生を分けたのだと、しだいにそのように感じるようになっていったのであろうと思う。かしくの賑いを聞き、ここの寂しさを見ると、道綱母は源氏物語の右近と同じく「さいはひの無きと有るとは、隔てあるべきわざかな」の思いを抱いたのかもしれない。

天禄二年（九七二）四月の記事に見られる「極めてさいはひなかりける身」という痛切な自己認識はそれとして、道綱母が兼家と結婚したとき、世間は道綱母を「さいはひあり」と思ったのではなからうか。かげろふ日記の求婚から結婚にいたる記事にその誇らしさの窺えることは、これまでも指摘されている。兼家との関係に対する誇らしさがなければ、かげろふ日記の執筆そのものがあり得なかったであろう。その意味では、道綱母もさいはひ（幸運）に出会わなかったわけではない。

「さいはひの無きと有るとは、隔てあるべきわざ」とはいえ、しかしながら、人は幸運だけでどのようにかなるものでもないという認識は平安時代でもおなじである。源氏物語の六条御息所の娘は、帰京後に源氏の後見により中宮にまで昇り、世間を驚かせるが、それについて、

御さいはひのすぐれたまへりけるをばさるものにて、御ありさまの

心にくく重りかにおはしませば、世に重く思はれたまへること、すぐれてなむおはしませける。
（少女（3）七五頁）

と語られている。また、「さいはひ人」と称された明石の君について、大宮は「さいはひにうち添えて」「心おきて、事もなかるべき人」だと呼んでいる（少女（3）二九頁）。与えられた「さいはひ」を生かし得るかどうかは本人の「ありさま」「心おきて」にかかってもいる。だから浮舟の女房は「昔も今も、もの念じしてのどかなる人こそさいはひは見はてたまふなれ」と諫めるのである。

運、不運、—さいはひ有りというのも、さいはひ無しというのも、結果論であり、またその人の当然あるべき状態をどの程度に見なすかにもよる。葵の上が源氏と結婚するのはさいはひ（幸運）によらないが、若紫が源氏と結婚できたのはさいはひ（幸運）による。源氏の娘（明石姫君）は中宮になっても、それは当然の人生だから「さいはひ人」ではない。明石の君は召人扱いでも「さいはひ人」である。

「さいはひ」をそのように理解したとき、道綱母の「極めてさいはひなかりける身」という意識のなかに、有り得べかりし人生への未練を見ることが可能であろう。と同時に、道綱母の意識はそれとして、世間が兼家の妾としての道綱母のありさまをどう感じたか、また幸運に添えて「心おきて」が大事だと考える世間が、自らを「極めてさいはひなかりける身」と嘆く道綱母の言葉をどう感じたかも、おのずから察しうるように思われる。